

国語

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章は、小池水音の小説『あこのころの僕は』の一節である。病気で母を亡くした五歳の「僕」は、かつて母と訪れた知人の別荘に、父と二人で来ている。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、文章には設問の都合上、行数を付してある。

1 父の涙をみるのは母の病室にいたとき以来だった。もう呼びかけてもほとんど返事をしなくなった母の横たわるベッドを、父と僕とえり叔母さんが囲んでいた。僕はえり叔母さん(ア)にウナガされて母の手を握った。父はベッドの反対側にいて、母の肩を撫なでていた。それは撫なでるといよりも手のひらを押しつけて、強く摩こすっているみたいだった。それから父は母のふくらはぎを摩こすった。足の裏を摩こすった。まるで母のからだのどこかに、大切な鍵が埋もれているのを探り当てようとしているようだった。

5 すこしして僕は手を握っているのに飽きてしまつて、隣の空きベッドのほうへ行き、よじ登るようにして座った。からだをハズませて、スプリングがぎしぎしと鳴るのを楽しんだ。そんなふりふりをした。本当は父が涙を流しているのを目にして、なんだかそれを見てもいけないような気がした。それから僕はえり叔母さんとともに、父だけを残して病室をでた。病院に来るたびにいつもそうしているように、自動販売機で売っている、缶をよく振つてから飲むゼリーの飲み物を買つてもらつた。

10 あのとときとおなじように父の涙をみてみぬふりするべきか、僕は悩んだ。涙を流す父の目は変わら(イ)ずまえを向いていた。視線のさきにはガラス戸があり、その向こうに草地があり、木々があり、真つ暗な海があつた。父はそうした景色を、母のからだを撫なでるのでなく摩こすっていたとおなじように、眺めるでなく目を凝らしているみたいだった。

もういいよ。あこのころの僕は、母の思い出をしきりに話そうとする大人たちに対してそうおもっていた。さみしがっている僕に、かわいそうな僕に、もういない母のことを話さなくていい。開いてしまった穴を埋めるようにして、さまざまな母を僕に教えようとしなくていい。おかあさんがいなくなつてやつていける。おかあさんの思い出を思い出さなくなつて生きていけるから、もういいよ。

15 それに葬儀の日、教会でソウのおばあちゃん(注)がちいさくつや眩くらいたことも、僕はしつかりと覚えていた。もう苦しくないね——ゾウのおばあちゃん(注)はほとんど花に埋もれた母に向けて言った。それならば僕たちはもう、苦しくなくなつた母のことを、そつとしておくべきなんじゃないか。いつまでも名残惜しく語り合っているようでは、ようやく去つた母の苦しみがよみがえつてしまうのではないか。そんなふうにおもつていた。

でも、いま(A)ま(A)さに父は涙を流していた。晩ごはんの終わりに父は僕に尋ねた。まえにもここに来たことがあるんだけど、覚えてる？ そつ口にしたときの父の真剣な眼差まなざししを僕は思い出した。父は僕の口から母の思い出を聞きたがつていた。僕のなかにある記憶のひとつを求めて、涙を流していた。僕こそ父のために探るべき記憶があつた。二歳の夏、母とふたりでこの場所を訪れたときに目にしたものの、(2)そのかけらでもい

いから思い出さなくてはならなかった。

手がかりがまったくないわけではなかった。昼間、少しだけ立ち寄ったサーブスエリア。あの平べったい建物をまえにして感じたことはきつと、母との旅行と無関係ではないはずだった。でも、その手がかりからどんな手順で、どこへ向かえばいいのか、見当がつかなかった。ハロウインの一件を思い出した。あのとき結局、僕は心に決めたはずの仮装を思い出出すことはできなかった。

部屋のあちこちに目を向ける。変わったかたちの椅子。壁に寄せて置かれた古いピアノ。なにが置かれているわけでもない木製の棚。それらの姿形を眺めることで、記憶がよみがえらないかと期待する。でも、だめだった。どの景色も目新しく感じられ、以前にも目にしたとはトウテイおもえなかった。

やがて父が静かに身を起こした。そのまま立ち上がり、広いガラス戸の両端からカーテンを引き寄せた。朝日が出たら眩まぶしいもんな。そう呟く父の声はすこし暖かれていたけれど、平常の声にもどりがつあった。草地が、木々が、海がカーテンの向こうに隠れると、部屋はほとんど真っ暗になった。それじゃあ、おやすみ。そう言ってまた布団に横たわった父の顔にまだ涙が伝っているのか、それとももう止まったのか、たしかめることはできなかった。

僕は暗がりのなかでもうしばらく、記憶を探りつづけようとした。しかしその努力もむなしく、強烈な眠気が僕の頭の奥深くに釣り針を掛けて、問答無用に引っ張っていた。あのころの僕はお風呂にはいって、お腹がいっぱいになってしまえば、あとはもう長く起きつづけることなんてできなかった。ごちそうさまだけじゃなくて、おやすみ言うことができなかった。そんなことをおもいながら、X 眠りのなかへと沈んでいった。

波音によって僕は目を覚ました。

夜であるとも、朝であるかもしれない時間だった。波音は眠りにつくまえもそのあととつづいていたのだから、それで起きたというのもおかしいのかもしれない。けれど目覚めた僕の耳がはじめに捉えたのは、まるで僕のもとにまっすぐに寄せてくるかのようにはっきりとした波の音だった。

30 布団にはいったまま身じろぎすると、昨晚父が引いたカーテン(エ)のフチが微かに色を変えているのが目にはいった。父はまだ布団にくるまって眠っているのが、薄らみえるシルエツトでわかる。よほどかたく引き寄せているのか布団はふくよかさを失い、乾いて丸まった落ち葉のようになっ(3)ていた。

45 まだ役目は終えていないのだというように、波音はくりかえし響いていた。波は僕を呼んでいるのだろうか。それとも誤って早く目覚めてしまった僕を、眠りの世界へ押し返そうとしてくれるのだろうか。耳を傾けているうちに僕は車中で流れていた、歌のない音楽を思い出した。波もまたなにかの訪れを待ちながら、くりかえし浜に打ち寄せているように聞こえた。

ゆっくりと布団を払い、身を起こす。立ち上がり、カーテンのほうに寄る。そのまま開こうとして、しかし眠っている父を起こすにはいけないと思ひ直し、僕はその場にしゃがんで、のれんをくぐるようにしてカーテンの向こう側へとからだをモグらせる。

そこに広がっていたのは、まさしくハロウインの夜にみたあの青い世界だった。

空が青かった。海が青かった。青色は崖のうえの一带にまで押し寄せてきていて、木々も、茂みも、草地も、岩も、すべてが一色に染まっていた。太陽はまだその姿をみせていなかった。暗いのは暗いだけ、夜の暗さとはちがった。光の乏しいのが夜ならば、その青い景色はまるで、光などというものがそもそも存在しない世界であるように感じた。

光とは異なるなにかによって、茂る草の一葉一葉は、まっすぐに伸びる木々は、その果てにある海と空は、曖昧にリンカクを浮かばせていた。鳥が鋭く鳴く声がすぐそばで響いた。その姿を探してガラス戸に顔を引つつかせてみたけれど、鳥はどこにも見当たらなかった。もしかすると鳥はもう姿をもたず、空の青に、木々の青に、あるいはタダヨウ空気(キ)の青に溶けこんだまま、その声だけを響かせているのかもしれない。

僕はまた夢のなかにいるのだろうか。そう頭をよぎったけれど、顔をつけたガラス戸はかたく冷たく、目のまえの景色が現実であることを僕に教えていた。ふとピンク色のボールが草地に落ちていたのをみつけた。昨日、父と一緒に遊んだ円盤に引つつくボールだった。それはあたり前の景色のなかでもっとも青色から遠い色をしていた。しかし、それでもなおボールは青かった。ピンク色をしていて、そのうえで青かった。これからさらに深い青色に染まり、やがていま微かに残っているピンクすら失ってしまうのかもしれない。⁽⁴⁾ハロウインの夜にみた景色を思い出しながら、僕はそのボールをじっとみつめていた。

それでも僕はそのとき、青一色に染まったその世界のなかにおいて、以前のような恐れを抱いてはいなかった。すべてが青く染まりきって、物と物とのあいだのリンカクがすっかり失われて、そしてすべてが終わってしまう。青は終わりの色。ハロウインの夜に抱いたそうした予感のよくなものは、もうなかった。

じぶんはこの色の広がり、ただじっとみつめていけばいい。白目も黒目も染まってしまうぐらい、深くこの色に身を浸していればいい。そのことがわかった。終わりとはちがうものが訪れようとしているのを、僕は知っていた。目のまえに広がる青色の景色の、僕がいる場所からもっとも遠く、もっとも深くで、それはいままさに生じようとしていた。ようやく僕は確信がもてた。僕はそれを思い出した。

宙に浮かぶように広がる海のかなた、水平線の一点に赤い光が滲みはじめた。リボンが解けて包装紙がはがされてゆくようにして、海の果てで青色がほころんだ。こんなふうにはひとりで起き出して日が昇る光景を眺めたことなんて、これまでに一度もないはずだった。しかし僕は以前にもまちがいなく、この景色をまえにしていた。世界にかけられたリボンが解かれ、包装紙がはがされて、そうして蓋が開くのを箱のなかからみつめるようなこの景色を、僕は知っていた。

それはきつと、母とふたりでこの場所を訪れたときにちがなかった。どうしてそれほど早朝に母と僕は起き出したのだろう。朝焼けを眺め

るために母が僕を起こしたのだろうか。あるいは、僕が泣きだしてしまったのだろうか。ケイイは記憶からすっかり抜け落ちていた。昨晚、僕は眠気にあらがいがいながら、奥底へと沈んでしまった母との思い出を探りつづけた。微かなヒントをたどってゆけないかと目を凝らした。けれども僕は、どのような経路もたどることもなく、まったくトウトツに、遠ざかっていたはずの記憶に触れていた。海の方こうから訪れる赤い光によって、かつて母とたしかに眺めた朝焼けの記憶のなかに、まっすぐに降り立っていた。

75 日の光があたりの景色から深い青色を払ってゆく。⁽⁵⁾僕はその光景をじつとみていた。姿をみせない鳥の鳴き声が次第に増えていった。すべての生き物たちを浸していた眠気が朝の光とともに、少しずつ蒸発して空に還^{かえ}ってゆくようだった。

起き出してきた父が隣でおなじ景色を眺めていることに、僕ははじめ気がつかなかった。左側のカーテンのなかに父は立っていた。僕は右側のカーテンのなかで、膝を抱えて座っていた。すごいなあと父が言った。こんなに綺麗^{きれい}な朝焼け、みたことないな。寝巻を着て、髪に寝癖のついた父は、張り切って目を輝かせていた昨日の父とはちがいがい、ふだんの家で目にするいつもの父にもどっていた。

80 おかあさんとみた。僕は自然と口を開いていた。そのとき崖下で波音がまたひときわ激しく打ちつけるのが聞こえた。おかあさんと一緒に、ここで朝焼けをみた？ 父が尋ねる。うん、みた。僕はそうきちんと返事ができる。そうか、みたか。父は眩くと、あとはただ黙って景色を眺めていた。

僕は次第にまた眠たくなった。⁽⁶⁾いま実際に海の方こうから差ししてくる赤い光が、かつての記憶の光と結びついて、ひとつの光源をなしていた。じぶんの内側と外側とが曖昧になり、夢のような現実とも、現実のような夢ともつかなくなっていた。ガラス戸の前で僕が寝入りかけているのに気づいた父は、からだを抱え上げ、布団まで連れていってくれる。まだ早いから、もうちょっと眠ったらいい。そんな声を遠くに聞きながら、かけ布団にくるまる。

父は僕のもとを離れると、カーテンの向こう側へともどっていった。父の影が朝日によってそこに浮かんでいるのを、僕は布団のなかからみている。父の影はやがてさきほどの僕とおなじようにしゃがんだ。カーテンを膨らませる丸いシルエツトをみつめながら、僕は二度目の眠りについた。

(小池水音『あのころの僕は』による)

(注1) ゾウのおばあちゃん……「僕」は、母方の祖母をこう呼んでいる。

問一 傍線部(ア)～(ケ)のカタカナで表記された語句と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解
答番号は 1 9。

(ア) ウナガされて

1

- ① ソクジツ発送の可能な商品を選ぶ
- ② 法律のサイソクを参照する
- ③ イツソク飛びにはいかないことが多い
- ④ 家族のソクサイを願う
- ⑤ 支払いをトクソクされた

(イ) ハズませて

2

- ① タンブンと複文の違いを確認する
- ② しばらくごカンダンください
- ③ ことのホツタンを明らかにする
- ④ 誤りをシダンされた
- ⑤ このままでは関係がハタンする

(ウ) トウテイ

3

- ① 数学で加法テイリを学んだ
- ② ロボットによるカイテイ探査が行われた
- ③ あとは書類のテイサイを整えるだけだ
- ④ 電流の流れにくさをテイコウ率で表す
- ⑤ 目的地までのドウテイを楽しんだ

(エ) フチ

4

- ① エン結びの神に祈った
- ② エンドウは応援の人で埋めつくされた
- ③ 試合はエンチヨウ戦にもつれこんだ
- ④ にぎやかなシユクエンを楽しんだ
- ⑤ 話し合いはエンカツに進んだ

(オ) モグらせる

5

- ① 教会でセンレイを受ける
- ② ビール瓶の口をセン抜きで開ける
- ③ 危険な場所にセンニユウする
- ④ 環境問題にイチイセンシンで取り組む
- ⑤ 美しいセンリツを奏でる

(カ) リンカク

6

- ① ガイカク団体に協力を依頼する
- ② シカクシメンな返答をする
- ③ イッテンイッカクもおろそかにしない
- ④ 防水のためにカクヘキを設ける
- ⑤ 英語でヒカクキユウを学んだ

(キ) タダヨウ

7

- ① 心をこめてボヒヨウを刻む
- ② イベント中止でヒヨウシ抜けした
- ③ 選挙でハクヒヨウを投じた
- ④ イヒヨウをつかれて驚いた
- ⑤ 茶渋をヒヨウハクザイで落とす

(ク) ケイイ

8

- ① 郷土のイジンについて調べる
- ② ポリエステルは合成セインだ
- ③ 幼なじみとはイシンデンシンの仲だ
- ④ 地図でイドを確かめる
- ⑤ この説にイロンを唱える人もいる

(ケ) トウトツ

9

- ① 最新の技術で世間をキョウトウさせた
- ② 彼女はセントウでゴールした
- ③ トウジの日にはかぼちゃを食べる
- ④ トウテツした論理に感心する
- ⑤ コウトウムケイな話を信じる

問二 二重傍線部(A) (C)の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は (A) (C)。

(A) まさに

- ① たしかに
- ② まったく
- ③ かならず
- ④ ただしく
- ⑤ よほど

(B) 努力もむなしく

- ① 努力のかいなく
- ② 努力もせずに
- ③ 努力が足りずに
- ④ 努力のやり場もなく
- ⑤ 努力のあげく

(C) 身を浸して

- ① くつろいで
- ② 流されて
- ③ 入りこんで
- ④ いやされて
- ⑤ 落ちこんで

問三 空欄 X に入る語として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① 果てしない
- ② 否応ない
- ③ 心置きない
- ④ 終わりのない
- ⑤ 目覚めにくい

問四 傍線部(1)「父はそうした景色を、母のからだを撫でるのでなく摩っていたのとおなじように、眺めるでなく目を凝らしているみたいだった。」とあるが、「摩」ることと「目を凝ら」すことが「おなじ」と捉えられるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 「僕」には、母と接するときの父が、病因を突きとめようとしているように見えたから。
- ② 「僕」には、母の体の上で動く父の手が、何かを見つめているように感じられたから。
- ③ 「僕」には、母の体に触れる父の様子が、何かを探しているように見えていたから。
- ④ 「僕」は、母を慰める父の動作に、愛情深いまなざしと同じものを感じとっていたから。
- ⑤ 「僕」は、母の苦痛をやわらげようとする父の動作に、強い集中力を感じていたから。

問五 傍線部(2)「そのかけらでもいいから思い出さなくてはならなかった」と「僕」が感じたのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 周囲の大人たちは「僕」には母の思い出を頻繁に話していたが、父に向けて話すことはなく、そのために父の心の傷が深まっていることに気づいたから。
- ② 周囲の大人たちは「僕」にいくつもの母の思い出を語ったが、父は口を閉ざしており、多忙だった父が母との思い出をあまり持っていないことに気づいたから。
- ③ 周囲の大人たちは「僕」に気軽に母との思い出をたずねたが、「僕」を傷つけることを恐れ、それを求めながらも控えてきた父の深い愛情に気づいたから。
- ④ 周囲の大人たちは「僕」に母との思い出を語らせようとして失敗してきたが、旅に連れ出してまで語りあおうとする父の真剣な思いに気づいたから。
- ⑤ 周囲の大人たちは「僕」のために母の思い出を話していたが、「僕」ではなく父がそれを必要とし、子どもの「僕」に求めていることに気づいたから。

問六 傍線部(3)「まだ役目は終えていないのだというように、波音はくりかえし響いていた。」とあるが、ここでの波音の「役目」はどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 昨夜、強い眠気に逆らえずに早寝した「僕」を起こし、かつて母としたように、父と夜明けの訪れを待てるようにすること。
- ② この別荘で母と過ごした思い出をたどりながら眠った「僕」を目覚めさせ、母とした早朝の海辺の散歩に出かけさせること。
- ③ 昨夜、幼児の習性のままに眠ってしまった「僕」を朝早く目覚めさせ、母と過ごした別荘の趣ある雰囲気や再び体験させること。
- ④ 思い出をたどろうとしながら眠ってしまった「僕」を夜明け前に目覚めさせ、別荘で母と過ごしたときの記憶を引き出すこと。
- ⑤ 昨夜、眠気にあらがって母の思い出をたどり、今朝も早起きした幼い「僕」に、年齢にふさわしい穏やかな眠りを与えること。

問七 傍線部(4)「ハロウインの夜にみた景色」とはどのようなものだったと考えられるか。その説明として最も適切なものを、次の中から

一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 空気が光の感じられない青一色で覆われたために、一つ一つのものの境界や固有の色が失われ、全てが終末を迎えることを感じさせるようになった景色。
- ② 空気が闇とも光とも異なるもので満たされたために、木々も鳥も本来の姿形がわからなくなり、生き物それぞれの個性が感じられない青一色となった景色。
- ③ 夜明け特有の青色で照らされたために、海も空も陸地も一体化して区別がつかなくなり、見る人を恐ろしい夢のなかにいると錯覚させるような景色。
- ④ 世界が光の存在を感じられない青一色で覆われ、海と空、陸地の生き物の息吹いぶきを感じられないため、二度と朝が来ないという恐ろしさを感じさせる景色。
- ⑤ 光とは異なる青一色の何かが充滿したために、自然現象それぞれの存在意義が曖昧になり、人々も自分の生きる意味を感じられなくなるような景色

問八 傍線部(5)「僕はその光景をじっとみていた。」とあるが、このとき「僕」にどのような変化が起きていたと考えられるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 母との思い出のうち自分にとって最も大切な部分を探りあてたことで、充足感と安心感を得ている。さらに、それが周囲の自然を目覚めさせる朝焼けの光であったことで、自分もこれから新しい生活を始められるかもしれないという希望を持ちつつある。
- ② 父のために求めながら探しあてられなかった記憶を見いだしたことで、無力感や欠落感から解放されている。さらに、それが世界に光を取り戻させる朝焼けの景色であったことで、周囲のものとともに自分も新しい一歩を踏みだせるような気持ちになっている。
- ③ 父に頼まれても思い出すことのできなかった母との時間を朝焼けのなかに見いだしたことで、父への義務を果たせたような気持ちになっている。さらに、まだ姿は見えないが確実に近くににいる鳥の鳴き声を聞いて、自分のなかにある新たな可能性を感じている。
- ④ 父に泣かれても話すことのできなかった母との大切な思い出が朝の訪れとともに再現されたことで、自分の記憶力に自信を持っている。さらに、夜を追い払う光にうながされて起きてくるであろう父と、その思い出を共有できそうだという見通しを持ちつつある。
- ⑤ 母と過ごした時間のなかで最も大切だったのが別荘での夜明けだったことを確信して、驚きながらも深い喜びを感じている。さらに、それが世界の色を変える朝焼けと結びついたことで、自分の生活が変わっていくことを感じ、受け入れようとしている。

問九 傍線部(6)「いま実際に海の向こうから差しってくる赤い光が、かつての記憶の光と結びついて、ひとつの光源をなしていた。」とはどういう状況か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 「僕」の外側にある現実と内側にある過去の夜明けの光景が一つになって、「僕」と近くにいる父の体を温めるはたらきをしている。
- ② いま現実と差している朝の光と過去に感じた光の区別がつかなくなって、「僕」と父の過去への暗いこだわりが消えようとしている。
- ③ 「僕」がいま実際に感じている光と過去に夢で見た光があまりに似ているために、現実と夢との区別がつかなくなっている。
- ④ いま目になっている朝焼けと過去の幸せな記憶のなかにある朝焼けが重なって「僕」の体を温め、心地よい眠気をさそっている。
- ⑤ 現在目になっている朝焼けと「僕」の過去の記憶のなかにある朝焼けが一体化して、「僕」と隣にいる父を明るく照らしている。

問十 本文の表現の説明として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 12～14行目では、「いい」という語を反復することで、大人たちに対して「僕」が感じていた拒否感を印象づけている。
- ② 25行目では、体言止めの短文を連ねることで、途切れてつながらぬ「僕」の記憶のありようを表そうとしている。
- ③ 38行目では、「まるで僕のもとにまっすぐに寄せてくるかのように」という直喩表現を用いて、幼い「僕」の自己中心的な感覚を表そうとしている。
- ④ 41行目では、父は布団を体に引き寄せて「ふくよかさを失」わせ、その様子が生命力の感じられない「落ち葉」にたとえられていたが、88行目では、父の体は朝日のなかで「カーテンを膨らませ」ている。この違いによって、父の心境の変化を表そうとしている。
- ⑤ 他者との会話にも「僕」の心内語にも「」をつけないことで、できごとと「僕」の心の内の世界が、切れ目なくつながっているような印象をつくりだしている。

問十一 次にあげるのは、ある小説の一節である。『あのころの僕は』と語りの形式の異なるものをつ選び、番号で答えなさい。解答番号は21。

① 生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かった。視覚は遠い灯を感じるだけだった。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだった。ただ頭だけが勝手に働く。それがいつそうそうという気分自分に自分を誘っていった。

(志賀直哉『城の崎にて』)

② 雨の中を濡れてきて、そのままずっと乾くまで歩きつづけた、といった感じのくたびれた服装で、しかし眼もとが明るく、けっこう正直そうな印象を与える青年が、私の事務所に現れた。新聞の求人広告を見たというのである。

(安部公房『鞆』)

③ じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑ってみせた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組みをしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

(夏目漱石『夢十夜』)

④ 老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はっていった。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

(芥川龍之介『羅生門』)

⑤ 老婆も何かしら、私に安心していたところがあったのだろう、ほんやり一言、
「おや、月見草。」

そう言つて、細い指でもつて、路傍の何か所を指さした。さつと、バスは過ぎて行き、私の目には、今、ちらと一目見た黄金色の月見草の花一つ、花卉も鮮やかに消えず残つた。

(太宰治『富嶽百景』)

〔選択問題〕 〈現代文〉か 〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕 〈現代文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

いまから四〇年ほど昔なので、こまかな記憶が定かなくなっているが、くたびれたフォルクスワーゲンに乗ってローマからパリまで九一日かけて走ったことがあった。

イタリアとスイスを走っているあいだは切り通しの峠やトンネルがあちこちにあったが、フランスに入ってデイジョンのあたりからパリまでトンネルはひとつもなかったように思う。緩やかにうねるように起伏が続く土地はどこまでも農作物で覆われ、その恵みの豊かさに心から感激した。このときの印象があまりに強かったせい¹か、山間の狭隘^{きょうあい}な平地にへばりつくよう¹にして作物を育てている日本の耕作風景に、若いころはさほど関心をいだいたこともなかった。

それが変わったのは一〇年ほど前である。

アメリカ・イリノイ州のシカゴからシャンペーンまで、やはり車で移動したとき、二〇〇キロほど続く道の両側がコムギ畑とトウモロコシ畑しかないことに気がついた。ハンドルを握りながら眠気に襲われ、ひどくつらい道中だった理由のひとつは、このあまりにも単調な風景のせい¹だった。

アメリカの農業は、驚くべき少品種大規模農業というほかない。アメリカの家族農業の平均作付面積は二〇〇ヘクタール強といわれ、これは日本の農家のおよそ一〇〇倍である。これだけの耕作地をもっているながら、アメリカの農家の暮らしは決して楽ではないと伝えられている。というのも、これよりもはるかに大規模な農業を効率的に展開している企業が農家の経営を圧迫しているからだという。それこそ何千ヘクタールという超大規模農場が出現しており、私がイリノイ州で通った地域もそうした農場が連続していたのであろう。あの途方もないスケールの農場は、われわれ日本人の想像力の外にある。

この異様とも思えるアメリカの風景とくらべると、日本の農業はまことに健全である。昔から自然を改造することなく、環境に負荷をかけない農業が営まれており、その最大の長所はアメリカとは対照的な多品種小規模にある。穀物のほかに季節ごとの野菜や果物を栽培することで土壌の劣化を防ぎ、明日の糧を約束してきたのだ。いわば自然と融合した里山風景は、安定した持続的な農業生産をもたらし、おだやかな日本文化をはぐくむ源になったといえる。

山国の日本は耕地面積が少ない反面、降水量が多く、しかも土が肥えている。古来、日本に耕作のための奴隷が存在しなかったのは、そのせいである。世界の多くの国は、日本ほど土壌に恵まれていなかったために無理な耕作を強いられた。このためウシやラバ、ロバといった農耕用

の動物を必要とし、さらにこれらの動物よりもよく言うことをきく労働力として奴隷が生まれた。

ところが日本では、だいたいどこでも鋤くわひとつあれば家族が食べていけるくらいの作物をつくることができた。耕作地が限られているから、せせこましい農業ではあるけれども、大規模農業ではないため、耕作用に家畜が必ずしも必要というわけではなく、まして奴隷は必要としなかった。結果的に自然環境に適応した多品種小規模農業が普及した。それも結局、土地が肥えていたからできたことである。

日本列島の土が農業に向いているのは火山のおかげで、火山灰に含まれるリン酸やカリウム、窒素が農作物の養分となる。火山列島の日本は、その十分な恩恵にあずかることができ、それほど無理をしなくても四〇〇〇万から五〇〇〇万の人口であれば食べていけるだけの豊かさをもっていた。⁽²⁾ 日本文化の基盤に、まずこうした穏やかな農業の恵みがあつたことを踏まえておきたい。

日本の文化や社会に通底する、この穏やかさは、島国という地理的条件によって育まれたことも見逃せないであろう。

日本は四方を海に囲まれているおかげで、古来、外敵から侵略されたり徹底的に荒らされたことがない。太平洋戦争で敗北したが、終戦後、天皇制にはアメリカの占領軍も手をつけることができなかつた。天皇制は神話の時代から連続と続く日本文化のいちばんの根幹部分であり、戦勝国のアメリカですら日本文化を蹂躪じゅうりふすることはできなかつたのである。このことで思い出されるのは、アフガニスタン紛争が一応の終結を迎えた二〇〇二年、カブールの国立アフガニスタン博物館の正面に「その国の文化が生きている限り、その国は生きている」という垂れ幕が誇らしげに掲げられたことである。

日本文化が外敵から侵食されなかつたなよりの証拠が正倉院の宝物であろう。あのような防衛機能もない木造建造物に、聖武天皇、光明皇后ゆかりの宝物が長い年月にわたって保管されてきた。⁽³⁾ このようなことは海外では絶対にありえないことだと断言してもいい。海外であれば一度戦争が起きたら、あのような施設はたちまち破壊されて、収蔵物はそっくり盗まれてしまう。それが日本では古代から現在にいたるまで、何度かの戦いに巻き込まれたにもかかわらず残っているのは奇跡と違ってよく、なんとという平和で、おだやかな国であることか。およそ世界の常識では考えられないことなのである。

それゆえに過去の有力者や寺社などに代々受け継がれた伝世品の豊かさ。これは世界に冠たるものがある。^(ア)

たとえば中国の舶来品は唐の時代から日本に伝わりはじめ、室町時代あたりからは日本から注文を出して中国で陶器をはじめとする工芸品が作られるようになったが、そういう中国のすぐれた工芸品が日本にはいまもたくさん残っている。当の中国では故宮博物院などに収蔵されているものを除けば、伝世品としてのいいものはほとんど残っていない。むしろ日本のほうが中国文化の歴史を語る逸品がよく残っている。

ヨーロッパでは、隠されたまま忘れ去られていた「遺宝」が見つかることがよくある。戦争になると徹底的に略奪されるため、防衛手段として宝物をひそかに隠しておく。それが後世、偶然発見されることがめずらしくない。こうした遺宝が日本で見つかることが少ないのは、それだけ戦争や略奪が少なく平和だった証拠である。

宝物の多くはその時代時代の権力者や神社仏閣あるいは金持ちから次の世代のかれらのもとへと転々としており、所有者を変えながら傳承されていくのが日本の宝物といえる。旧所有者との政治的、宗教的な対立が激しくないため、旧所有者の名前を明示することによって伝世品の価値を高めることができた。

悔やまれるのは明治初年、日本全国に吹き荒れた^(注3)廃仏毀釈の愚行で、これがなければより多くの貴重な文化財が残っていたにちがいない。パリにある東洋美術専門のギメ美術館には、日本の仏像が大量に所蔵されている。明治の廃仏毀釈のとき、ここに一点強の仏像が一時避難させられたためで、その後、結局そのままになってしまった。このように廃仏毀釈のときに散逸した仏像がどれほどにのぼるのか計り知れないほどである。さらに明治以降、海外から日本の文化財が大量に買い集められており、それだけ海外に流出してもなお多くの文化財が残っているのである。あらためて日本の文化財の蓄積の長さや厚みに驚かざるをえない。

それも結局、もともとの日本社会の穏やかさに加えて、X が小さかったからであろう。外来文化によって生活様式や思想が一気に様変わりすることは過去になかった。こういう国はやはり世界でもめずらしい。

もっとも、だからといって島国日本では古来のピュアな文化が連綿と受け継がれたかという点、決してそうではないのである。

X が小さかったのは事実であるけれども、それは外来文化が来なかったわけではなく、日本にもそれは来ている。ところが日本の場合、それと敵対することなく、柔軟に受けとめて、いつもまにか既存の文化と融合してしまうのだ。外来文化を異分子として排除するのではなく、そのときどきに入ってくる外来文化をい^(イ)わば自家薬籠中のものとするごとく、うまく取り込んでしまう。要するに外来文化にたいして非常に柔軟性があり、それが日本文化のもうひとつの特徴で、かつユニークなところなのである。

そういう視点で日本の文化を眺めてみると、たとえば平安末期から鎌倉時代にかけて、運慶や快慶らの仏師により非常にリアルな仏像がつくられるようになるが、これは当時、中国で写実的な芸術表現がさかんになったためだ。その後、中国・宋^(注4)の時代に朱子学を中心とした新しい儒学が隆盛になると、日本でも宋学の研究がさかんになるとともに五山文学^(注5)のような知的で洗練された文化が栄えている。

そもそも六世紀に仏教が伝来したときも、日本の既存宗教とのあいだで大きな衝突は起きておらず、やがて神仏習合が生まれ、いつしか仏教寺院の境内に寺の守護神が祭られて鳥居が立つようになった。日本古来の神さまと大陸からやってきた仏さまが仲よく手を組んだのである。やはり大陸から伝わった漢字も万葉仮名になり、さらに平安時代になると、万葉仮名はひらがなに変化している。

日本人にかかると、外来文化をうまく咀嚼^(そじゆ)して、いつのまにか自分たちの都合のいいように変幻自在につくりかえてしまう。この柔軟性は見事というしかない。

江戸時代の鎖国下でも日本人は外来文化には敏感だった。当時、外来文化の数少ない伝達者のひとつが朝鮮通信使^(注6)で、彼らが来日すると、江戸へ向かう街道筋の宿場ごとに、その地域の漢学者が自分の漢詩を持参して通信使に作品の添削を願っている。つまり、彼らを異国人という

よりも知識人として見ており、柔軟性をもって彼らと接していたことがわかる。ただし、新井白石が登場するころには、わが国の漢学も朝鮮と同じレベルに達したようである。

戦後、大きな混乱もなく日本に民主主義が根づいたのも、この変幻自在の柔軟性によるところが大きい。それと、日本人すなわち単一民族と考えがちな日本人のメンタリテイのなかに溶けこんでいる Y。日本人がもつこの柔軟性と Y が、世界でも希有なほど短時間、かつスムーズに第二次世界大戦後の民主主義を定着させた要因であろうと思われる。

ただ惜しむらくは、⁽⁴⁾こうした日本人がもたらす日本文化の特徴をわれわれ日本人自身があまりよくわかっていない。

(青柳正規『文化立国論』による。小見出しは省略した)

(注1) アフガニスタン紛争……一九七八年以降、現アフガニスタン・イスラム共和国において断続的に発生している戦争。

(注2) 故宮博物院……台湾の台北市に所在する博物館。もとは一九二五年に北京の故宮(紫禁城)で開館したが、政変により南京等へ宝物を移動させ、第二次世界大戦後に台湾へそれらを移送した。

(注3) 廃仏毀釈……明治時代初期に起こった、仏教の迫害及び仏教美術の破壊。神道と仏教を分離させ、神道を国家宗教とする思想から進められた。

(注4) 朱子学……中国、南宋の朱熹(一一三〇—一二〇〇)によって構想された儒学。

(注5) 五山文学……鎌倉時代末期から室町時代にかけて展開した禅宗の僧侶たちによる漢文学。

(注6) 朝鮮通信使……江戸時代、徳川将軍の交替ごとに朝鮮から派遣された外交使。

(注7) 新井白石……江戸時代中期の学者、政治家(一六五七—一七二五)。

問一 二重傍線部(ア)「世界に冠たる」、(イ)「自家薬籠中」のことばの意味として、最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22・23。

(ア) 世界に冠たる

- ① 世界的な基準に達している
- ② 世界水準の賞を授与される
- ③ 世界のなかで最も高い水準にある
- ④ 世界中に知れわたる事物を隠蔽する
- ⑤ 世界にむけて発信する

22

(イ) 自家薬籠中

- ① いつでも自分にとっては効用がある
- ② 自分だけの秘密にして大切に保管する
- ③ 歴代にわたり自分の家で大切に伝承する
- ④ 自分の家だけが製法や扱い方を知っている
- ⑤ いつでも自分の思うままに扱える

23

問二 空欄 X・Y に入ることばとして最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

24・25。

X

24

- ① 外来文化に接した喜び
- ② 日本人の感情の起伏
- ③ 日本という国家の規模
- ④ 外来文化による侵食
- ⑤ 戦争や略奪による被害

Y

25

- ① 斉一性
- ② 硬直性
- ③ 消極性
- ④ 勤勉性
- ⑤ 中立性

問三 傍線部(1)「このあまりにも単調な風景」とあるが、この表現から筆者は何を示していると考えられるか。その説明として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 二〇〇キロほど道の両側に続く大規模なコムギ畑とトウモロコシ畑は、日本人である筆者にとっては自国内でも見慣れたものであるという、新たな感興を覚えることがない退屈感。
- ② 大規模農業で実際には様々な作物が生産されているにもかかわらず、筆者が車で移動した地域はコムギ畑とトウモロコシ畑だけが広がり、多様な作物を目にできなかったという失望感。
- ③ 環境に負荷をかけない日本の農業を知る筆者としては、イリノイ州の大規模農業は多品種を栽培できる技術をもちながら、せっかくの広大な農地を生かし切れていないと思った優越感。
- ④ コムギ畑とトウモロコシ畑ばかりが道の両側に二〇〇キロほど延々と続く、日本人の想像を遥かに超えた大規模かつ少品種の農業が展開する耕作地を長時間移動した疲労感。
- ⑤ 大規模なコムギ畑とトウモロコシ畑が続くような、どこまでも農作物で覆われているイリノイ州の風景は、以前ローマからパリまで運転したときにも目にしていたという既視感。

問四 傍線部(2)「日本文化の基盤」として筆者が考える要素には該当しないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

27。

- ① 農業に適した日本列島の土
- ② 奴隷に代わる労働力の家畜
- ③ 環境に適応した小規模農業
- ④ 島国という地理的条件
- ⑤ 自然と融合した里山風景

問五 傍線部(3)「このようなことは海外では絶対にありえないことだと断言してもいい。」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。その理由として、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 28。

- ① 歴史的にみると、海外では宝物の存在が戦争を起こす大きな原因であるので、それらを保管する建造物から徹底的に破壊されるため。
- ② 歴史的にみると、海外であれば戦争が勃発した場合、宝物を保管する建造物の破壊や宝物の盗難が必ずといってよいほど起きるため。
- ③ 海外では戦争が勃発する可能性があると、敵国に略奪されることを不名誉として、侵略の前に自国民が宝物を持ち出して隠すため。
- ④ 島国である日本と異なり、敵国の侵略を受けやすい海外の多くの国では、国民たちの安全が最優先され宝物の価値は看過されるため。
- ⑤ 海外であれば戦争が進行しても、宝物を保管する建造物は木造建造物ではないので移築できず、必然的に宝物の破壊は免れないため。

問六 傍線部(4)「こうした日本人がもたらす日本文化の特徴」とあるが、この特徴を示す事例として適切でないものはどれか。次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① 海外の芸術表現から影響を受けた写実的な仏像
- ② 外来文化と古来の既存文化との融合
- ③ 伝来した文化財が海外流出することへの寛容さ
- ④ 六世紀における仏教伝来後の神仏習合
- ⑤ 漢字を母体とした万葉仮名やひらがな

〔二〕〈古文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

慶安(注1)のころか。津の国、内瀬(ないせ)といふところに、百姓(a)の、妻果(b)てけるに、その七日目に、また余(注2)の妻を呼べり。ためし少なくぞはべる。「まだ(1)き涙に袖ひぢて、あと巾(とら)ひこそせめ。」などて、巷(ちまた)(2)めやすくもなしとそしる。

案のごとく、後の妻、来ると、そのままものけづきて、夜も日もものぐるほし。女の父母、「さやうのところにながらふべきなし。帰れ。」といへど、深く思ひ入りて、この女、帰るべき覚悟はなし。夜昼(よひひら)としもなく、はじめの妻、来たりて、くんづ(注3)ころんづする。人目にはひとり狂ふやうなれども、かの妻の目にはありありと見えたり。

笑止(わらど)ぶりに思ふ人、二月堂(にがつどう)の牛王(うしおう)を貸しければ、その間は来(き)たらず。貸したる家に行き、「いかで牛王を貸したるぞ。」とうらむ。この人、大(5)きに驚(おど)きて、これをとりかへす。

しかるに、いまの妻、心強くは言へど、気も(注5)うかとなりて、見るさへあさましかりければ、親しき人、その男に異見(いけん)するは、「死して七日目に今の妻を呼び、あともしかしか巾(注6)ひたまはず。御身のあやまりにあらずや。」と言ふ。男、「げに、もつともなり。」と、いそぎ、我が寺に行き、様子語りければ、「さらば、あと巾(注7)はむ。」とて、浄土真宗なりしが、観無量寿経をよみて念仏廻向(ねんぶつまがう)す。まことに仏力不思議にして、猛火転じて清涼風となりしにや、その夜より幽霊来たらず、妻も本性(ほんしやう)になれり。あ(注8)らそはれぬこと(e)にあらずや。また、いそがしさうにのちの妻呼びたるも新しきことなり。はた、うらみざるべきか。

〔御伽物語〕による

(注1) 慶安……江戸時代初期の年号。

(注2) 余の……ほかの。

(注3) くんづころんづする……組みつ転びつする。取っ組み合いをする意。

(注4) 牛王……牛王宝印。厄難除(やくなんぞ)けの護符。

(注5) うかと……上の空である様子。

(注6) しかしか……しつかり。

(注7) 念仏廻向……念仏の功德をあまねく振り向けること。

(注8) あらそはれぬこと……言い争う余地のないこと。疑う余地のないこと。

問一 傍線部(2)「めやすくもなし」、(3)「案のごとく」の現代語訳として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は(2)は 30、(3)は 31。

- (2) めやすくもなし
- ① 恥ずべきことだ
 - ② 見苦しいことだ
 - ③ いたたまれないことだ
 - ④ 落ち着かないことだ
 - ⑤ 節操のないことだ

30

- (3) 案のごとく
- ① 熟考したとおり
 - ② 計画したとおり
 - ③ 意図したとおり
 - ④ 提案したとおり
 - ⑤ 予想したとおり

31

問二 波線部(a) (e)の「に」の文法的説明の組み合わせとして正しいものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

32。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|---------|---|--------|---|--------|
| ① | a | 断定の助動詞 | b | 断定の助動詞 | c | 形容動詞の一部 | d | 助詞 | e | 助詞 |
| ② | a | 助詞 | b | 断定の助動詞 | c | 助詞 | d | 助詞 | e | 助詞 |
| ③ | a | 助詞 | b | 完了の助動詞 | c | 助詞 | d | 完了の助動詞 | e | 断定の助動詞 |
| ④ | a | 接続詞の一部 | b | 助詞 | c | 接続詞の一部 | d | 完了の助動詞 | e | 助詞 |
| ⑤ | a | 助詞 | b | 助詞 | c | 接続詞の一部 | d | 断定の助動詞 | e | 断定の助動詞 |
| ⑥ | a | 断定の助動詞 | b | 助詞 | c | 形容動詞の一部 | d | 完了の助動詞 | e | 断定の助動詞 |

問三 傍線部(1)「あと弔ひこそせめ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 33。

- ① 亡き人の菩提^{ぼだい}を弔う人もきつといるだろうということ。
- ② 死に別れたのちの悲しみを述べるのがよいということ。
- ③ 死後の罪障の消滅を願って出家するのがよいということ。
- ④ 亡くなった人の供養をして冥福を祈るのがよいということ。
- ⑤ 逝去した人を冥界になりと訪ねていくものだろうということ。

問四 傍線部(4)「もののけづきて、夜も日もものぐるほし」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 34。

- ① 怪異に遭遇しておびえたようになり、夜も昼も何とも見ていたたまれない様子であること。
- ② 魂が遊離したようになり、夜も昼も心理的に異常な様子であること。
- ③ 何かの霊がとりついたようになり、夜も昼もなにやら正気ではない様子であること。
- ④ 全身に毛が生えたようになり、夜も昼も異様な仕草を繰り返す様子であること。
- ⑤ 化け物に魅入られたようになり、夜も昼も恋い焦^こがれている様子であること。

問五 傍線部(5)「笑止ぶりに思ふ人」とあるが、どのような人か。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① この後妻の様子を聞いて、深刻で笑ってはられないことだと思った人。
- ② この後妻の姿を見て、その異様に失笑を禁じ得なかった人。
- ③ この後妻のうわさを聞いて、もしかしたら笑い話ではないかと思った人。
- ④ この後妻のうらみを知って、笑って見過ごせないことだと思った人。
- ⑤ この後妻の苦悩を気の毒がって、悲しみに沈んでしまった人。

問六 次の各選択肢の説明のうち、本文の内容に合致するものを二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は

36・37。

- ① 牛王宝印を貸した人は、後妻のためにしたことではあるが、前妻の霊が自分に怨念を向けるという結果になったため、後妻から牛王宝印を返してもらった。
- ② 前妻の霊は、後妻が嫁いできたたん、後妻にとりつくようになり、そのあと、夜も昼も何年となくずっと後妻を苦しめ続け、周りも驚く様子だった。
- ③ 前妻の霊は後妻に暴力をふるい続けて後妻を苦しめ、前妻の目には後妻の狂うように逆らう姿がはつきりと見えていたが、周囲にはその具体的な様子が見えなかった。
- ④ 男が寺に頼んで観無量寿経の読経をしてもらったところ、前妻を苦しめていた地獄の業火が涼しくさわやかな風に転じたのか、前妻は成仏し、幽霊として現れなくなった。
- ⑤ 前妻の両親は、自分の娘の霊が現れたと聞いて、成仏せずに長くこの世にいるべきではなく、冥界に帰るように言ったが、霊は帰ろうとしなかった。
- ⑥ 百姓が妻の死後にまた新しく女性と結婚するということはあまりなく、前妻の霊が怨念をもって出てきたのも無理はないことだと語られている。